

平成28年2月

石黒香里 学位論文審査要旨

主 査 南 前 恵 子
副主査 前 垣 義 弘
同 吉 岡 伸 一

主論文

Realities and challenges of support for children with special needs in nursery schools

(保育所における特別な配慮が必要な子の支援の現状と課題)

(著者：石黒香里、吉岡伸一)

平成28年 Yonago Acta medica 掲載予定

参考論文

1. 「気になる子」への関心と対応の困難さに関する研究—保育士への質問紙調査から（第一報）—

(著者：石黒香里)

平成27年 保育と保健 21巻 32頁～36頁

学 位 論 文 要 旨

Realities and challenges of support for children with special needs in nursery schools (保育所における特別な配慮が必要な子の支援の現状と課題)

近年、保育所や幼稚園で特別な配慮が必要な子が増加している。Gillberg (Res Dev Disabil, 2010) は、明確な診断が付けられないが、正常な発達とはニュアンスが違う子ども達を「神経発達に関する臨床検査が必要であると気付かせてくれる小児期早期の症候群」(ESSENCE) と名づけ、適切な支援が重要だと指摘している。特別な配慮が必要な子とは、軽度の知的・身体発達の遅れ・マルトリートメントなども含まれ、ESSENCEと同義語と考えられ、また、発達の気になる子として扱われている。保育士にはそのような子の気づきの段階から、問題行動などの基盤に発達障害があるのではという観察の視点が必要である。今回、地域の支援体制の現状から、保育士が今後どのような学びや社会資源を望んでいるのかを明らかにし、医療・福祉・心理・教育・行政職などの役割と連携の在り方、保護者対応について考察を加え、今後の課題について検討した。

方 法

島根県79園と高知県75園に勤務する保育士2476名を対象に、無記名自記式質問紙票により調査を実施した。調査内容は、保育士の属性、特別な配慮が必要な子(気になる子)に対する考え(保育上の困難さ、支援体制の現状、必要とする学びと社会資源)、行政や制度に対する意見と要望(自由記述)等である。解析にはSPSS version19を用いて、単純集計とクロス集計を行った。統計学的検定は、 χ^2 検定を用い、有意水準を5%とした。保育士による行政や制度に対する意見と要望に関する自由記述の分析は、KJ法を用いて分類し、カテゴリー化した。

結 果

118園の保育所の保育士1509名から回答が得られ、うち有効回答は1233名であった。90.7%の保育士が発達の気になる子の対応に困難を感じていた。また、調査した全ての保育所に気になる子と感じている子どもが在籍していた。気になる子への対応で困難を経験したことのある保育士が必要とする学びは、具体的対応策、疾患の知識、保護者対応のスキル等であり、必要とする社会資源は、加配保育士の増員、5歳児健診の実施、助言者の確保等で

あった。現在、保育上の困難感を感じている保育士らは、多職種の役割理解 ($p < 0.01$) や保護者対応のスキル ($p < 0.05$) を必要とする学びと感じていた。行政や制度に対する意見と要望の自由記述は、1. 保育行政への要望、2. 専門スタッフとの連携、3. 保護者支援の在り方、4. 発達健診の在り方、5. 保育現場のニーズの5カテゴリーに分類された。具体的な要望では、保護者に適切な助言ができる人材育成が求められていた。また、各自がスキルアップできる系統だった研修会に参加し力量を高めることや、定期的連携の取りやすい環境整備などを望んでいた。

考 察

今回の調査結果から、ほぼ全ての保育所に発達の気になる子が在籍し、現場の保育士にこのような子の対応に困難感を抱かせていることが明らかとなった。そのため、保育士は、正常発達を学んだ上に、発達障害に関する知識の習得が不可欠であり、保育士養成課程での履修科目における保育実習に時間をかける必要がある。同時に、保護者にも発達障害に関する知識を学ぶ機会が必要である。

保育士が必要とする社会資源として、加配保育士の増員、5歳児健診の実施や助言者の確保等が挙げられていた。助言者の確保として、園内の特別支援調整役や発達障害に関する知識を持った専門保育士の人材が必要で、発達障害に特化した保育士の育成が必要と考える。また、地域での社会資源が不足しないような対策も求められ、人材育成と行政も含めた連携体制の構築が必要である。さらに、発達の気になる子や明らかな身体的・知的な発達障害を持つ子どもの早期発見や対応に向けて、5歳児健診を含む乳幼児健診の在り方を考える必要があり、また、保護者も含めて対話とフォローアップが求められる。

結 論

特別な配慮が必要な子に関する社会的関心は高いが、ほとんどの保育現場でその対応に苦慮していることが判明した。このような子どもを理解する上で、保育士の資質向上と経験知の蓄積、および多職種の専門家による連携を継続させることの重要性が示唆された。